真・恋姫†無双　外史に落とされた絶望

ハヤテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　外史に落とされた絶望

【Ｎコード】
Ｎ０９６９Ｔ

【作者名】
ハヤテ

【あらすじ】
東方の世界でのびのび過ごしていた水月零は八雲紫という妖怪に異世界に落とされてしまう。その異世界とは・・・。
この小説は作者の作品の東方堕天録の主人公がこの作品でも主人公です。
チートです。嫌いな人は今すぐバックしてください

プロローグ（前書き）

この小説は作者の暇つぶしで書いたものです。
あと、作者に原作知識はないのでキャラ崩壊や口調がおかしい時があります。
その時はやんわり教えてください。キツイ意見とかは勘弁。作者はガラスのハートです。

プロローグ

やあ。おれの名前は水月零(みづきれい)だ。前世では不幸にも神のミスで殺され転生し、数億年を生きた妖怪だ。
ぶっちゃけ、ピンチだ。気が付いたら荒野にいた。ていうか、起きたらこうなってた。

???『それについては今から説明するわ』

む。この声は・・・紫か！！

紫『あたり～。で、説明するけど、そこは恋姫無双っていうエロゲの世界よ。正確にはゲームじゃなくて異世界だけどね。で、この前そのエロゲやったんだけどねー、北郷一刀っていうのがムカついてね。へぼいくせに立派にハーレム作っちゃってってね。それを捻じ曲げてほしいのよ。あ、でも、零くんはこれと言って何もしなくていいわ（だって、無意識なフラグ製造機だし）。あ、それと、華雄って言うこと孫策、
周瑜って言う子を死なせないこと。そんなものね。あ、零くんこの世界じゃ最強で相手になるのなんて呂布って子ぐらいね。だからハンデとして顔を包帯ぐるぐる巻きにして視界を奪わせてもらったわ。じゃ、がんばってね～。あ、武器っていうか戦闘は憑依した正ちゃんを使う感じでいいわ。それと、それ、三国志の世界だけど武将が全員女の子だから。がんばってね～』

ハ、ハハハ・・・

賊1「おい兄ちゃん、命が惜しければ身ぐるみおいていきな！！」

ハハハハ！！ふざけるな！！なんで俺があいつの為に異世界でハーレム阻止したり人救わなきゃならん！

賊1「おい！！聞いてるのか！！」

それに三国志だと？ますますふざけんじゃねえ！！何がうれしゅうて天下取り合戦に参加しなきゃならないんだよ！！

賊2「アニキ。こいつ、気でも狂ったんじゃないんですか？」

賊1「そのようだな。さっきからぶつぶつ変なこと呟いてるしな。おい、お前ら！！やっちm「まてええええええ！！！」っ、な、なんだ？」

？？？「3人で1人を脅すなど卑怯者が！！」

ドス、ガス、ゴス！！

賊1・2・3「「「ぎゃあ！！」」」

それに顔に包帯？確かに視界は真っ暗や。それはいい。ハンデ？人間相手にゃあ足りない位だ。だがな、
なんで武器が正憑依状態やねん！！それなら素で正よこしてくれりゃあいいじゃねえか！！くそ！！シャレにならん！！

？？？「大丈夫ですかな？」

・・・決めた

零「決めたぜ・・・」

???「ん？なにを――――」

零「あのスキマァ・・・ぶっ殺してやる！！！！」

あたり一面に殺気を振りまく。さあ、どこにいるのかな？かな？

???「な！？（この御仁、なんて殺気をだすんだ）」

零「そうと決まれば早速スキマを・・・開けんように固定してやがる。ど畜生が！！空間ごと切り裂いてやろうか？」

???「お主！！」

零「いや、いっそのこと次元ごと切り裂くか？いや、それはいかんな。さすがに」

どうやって、炙り出してやろうかな？

???「お主！！！！」

おおう！？

零「び、びっくりした。なんでしょう？」

???「やっと気付きましたか。それで、賊に襲われていたようでしたが大丈夫ですかな？」

え？賊？

零「そんなんいたのか、全然気付かなかった」

趙「気付かなかったって・・・、ああ、失礼、私は姓が趙、名は雲、字が子龍。あなたは？」

はー、こいつが。全員女って言ってたけどあながち嘘じゃなさそうだな

零「おれは水月零。そうだな・・・姓が水月、名が零だな。字は無し」

趙「字が無いとは変わってますな」

だって日本出身だし。

趙「で、さっきの続きだが「星ちゃーん。置いてかないでください～」おお、すまんな」

???「まったく～。置いてかないでくださいよ～」

???「そうですよ。わたしは星と違って体力がないんですから」

ん？何だこのちびっ子とメガネは。あ、なんで見えるのか気になる？それは、空気の流れとかその辺を色々感じとって相手の体格や装備品を判断してるからだな。だから、顔は分からないし正確にあってるかもわからん。

???「おや～？誰ですか？そこの包帯さんは～」

零「ああ、おれは水月零だ。字はない。適当に呼んでくれ」

程「そうですか～。では、お兄さんと。風は姓が程、名が?、字が仲徳です～。よろしくです～」

戯「字がないのは変わってますね。私は訳あって戯志才と名乗っております。よろしくお願いします。水月殿」

零「ん。よろしく」

なんかいきなり結構な大物に会ってない?ていうか、さっきから変な名前で呼び合ってるけど、これはスルーが1番だな。おれの長年の勘が触れるなと言っている。

趙「さて、自己紹介も終わったことですしお聞きしてもいいですかな?何故賊にあれほど接近されても気付かなかったのか。そして、何故そんなに包帯ぐるぐる巻きなのか」

零「いや、賊には普通に気付かなかったから何だけどな・・・。包帯は・・・まあ、簡単に言うと戦いに対する枷だな」

趙「ほう、何故枷など?」

零「付けろって言われたからだ。まあ、生きてく上で全然支障ないから良いんだけど、正直息は吸いにくいな。ちょっと、待ってて、外すから」

シュルシュルシュルシュルシュルシュルシュルシュルシュルシュル

ふう、やっととれた。あー、髪もぼさぼさだ。まったく、巻き方ぐ

らいしっかりしてほしいよな。

趙・程・戯「「「っ！？／／／」」」

ん？なんで、顔が赤いんだ？もしかして・・・

零「風邪か？」

この時代の病気は洒落にならないからな。大変だ。

趙雲達の額に手を当て確認する。

趙「なぁ！！／／／」

程「！？／／／」

戯「っ！？／／／」

零「風邪じゃないな。まあ、気をつけろよ」

ん？なんかさっきより顔赤くない？ま、いっか。

趙「あ、ああ・・・。水月殿はこれからどうするつもりですか？見たところ手持ちなしのようですが」

零「おお！そうだった。この辺に村ない？路銀とかないからな。なにかして稼がないと」

紫殺しはとりあえず保留にして言われたことをこなしてくか。華雄とか、北郷とか。

趙「それなら私達もいま向かっているところなので、一緒に行きますかな？風と稟もいいか？」

程・戯「「いいですよ～（はい）」」

零「んじゃあ、よろしく」

こうして、強引な異世界生活は始まった

プロローグ（後書き）

アドバイス、キャラの特徴・口調などあらましたらどんどんお願いします

第1話

あの後、趙雲達と一緒に村まで向かった。うん、ここまではいいんだ。だが問題はこの村に向かう途中になんだ。なぜなら・・・

趙「水月殿！！村に着いたら手合わせを願えないかな？」

って、なったわけですよ。もちろん、断ろうと思ったんだが・・・

程「それは興味深いですね～。賊に襲われても気付かなかったことが、ただ単に鈍感なのか、それともそれに伴った実力があるのか。ね？お兄さん」

やめて！そんなきらきらした目でこっちを見ないで！！断りにくくなるじゃないか！？

戯「たしかに。それは気になりますね」

な！さらに追い打ちだとぅ！！？やるしかないってのか？いや、まだ、切り抜けることができるはずだ。どうする？

1、逃げる

2、話を変えてその場凌ぎ

3、諦めてバトル

こんなもんか。とりあえず1はねえな。逃げたらおれは野垂れ死ねる自信がある！！
なら、2か3か。ん～、よし！！

零「そういえばさー」

選択肢は2だ！！

趙「話を変えようとしても無駄ですぞ？」

零「おとなしくお手合わせさせていただきます」

フフフ、もうどうとでもなれ。

風「あ、村が見えましたよ～」

お、ホント・・・だ？

零「あ？何だあれ。妙に慌ただしいな」

戯「零殿。まさか見えるんですか！？」

零「バッチリ見れるな。んー、あー、そういうこと。めんどくさいな」

賊が攻めてくるねぇ。時間的に・・・あと15分頃ってとこか。よし、これを機にこの正劣化版憑依がどの程度使えるか試すか。どこまで刀を伸ばせるかな？

趙「水月殿！1人で納得してないで私たちにも説明してくれないか

？」

あ、忘れてた。いかんいかん。つい人間のスペックの事を忘れて1人で先走ってしまうな。気を付けよ

零「賊が攻めてくるらしい。あ、おれちょっと先に行ってくるわ」

趙「私も行きますぞ！風、稟、悪いが先に行かせてもらう！！」

程「はい～。お気をつけて～」

戯「がんばってください」

む。趙雲も来るのか・・・。こりゃ、暴れられないな。加減しなくては。

零「まあいいや。んじゃ、ちょい失礼」

趙「え？きゃあ！」

趙雲を小脇に抱え・・・

零「んじゃ、舌噛まないように気をつけろよ」

猛スピードで走る！！速度は多分新幹線ぐらい。

趙「きゃあああああああああああ！！！！」

程「ほ、ほんとにお兄さんは何者なのですかね～？」

戯「に、人間離れしてますね・・・」

着くのは一瞬だった。まあ、新幹線並の速度だからね。それは当り前だな。

零「ほい。着いたぞ」

趙「～～～～っ、水月殿！！あんな速さで走るなら先に言ってくれ！危うく失神するところでしたぞ！」

零「ああ、すまんな。なにせ、急ぎだからな。ほら、もう目の前まで」

あと、１０分ぐらいかな？結構あっちも速さがあるな。

趙「む。ホントですな。義勇軍は・・・って、水月殿？」

お、義勇軍いた。さて、んじゃあ、言うこと言うか

零「すみません。みなさん。突然ですがここはおれとあそこにいる趙雲がなんとかしますので、みなさんはここでのんびりしててください」

村人「な、なんだと！？よそ者が出しゃばるな！！」

む。やっぱりそうなるか・・・。困ったな。あんまり数がいると――

趙「ちょっと水月殿！？何言ってるのですか！ここは協力して――――」

零「みなさん。結婚している方はどのくらいいますか？」

およそ、3分の2の人が手を上げた。よし、このくらいいれば・・・・

零「なら、あなた方はますます、こんなくだらない戦に出るべきではないでしょう。考えてみてください。あなた方が死んだら残された妻や子供達はどうなります？簡単に予想が付くでしょう。こんなご時世です。今日あなた方が戦って勝ってもまた賊が来るかもしれません。そんな時夫を失った妻や子供はどうするのです？売られ、あるいは犯されるでしょうね。あなた方は妻や子供にそんなつらい目に合わせたいんですか？」

みんな無言だった。なかには涙を流している者もいる。

零「もう1度言いますよ。こんなくだらない戦はおれ達に任せて皆さんはのんびりしていて下さい。
ですが、そうですね・・・・、どうしても、どうしても村の為に戦いたい、そういう方は一緒に来てください。ただし、それは独り身の方だけです。それ以外は絶対だめです。夫は家族を守る義務がある。こんなところで死んではいけません。どうですか？」

村人「・・・あなたの名前は？」

零「水月零です」

村人「この村をお願いします！！どうか妻や子供の事を守ってくだ

さい！！」

零「はい、任されました。それで、だれかどうしてもって人はいますか？」

聞いてみたら、ざっと、２０人ぐらいの若者が手を上げた。んー、まあこのくらいならいいか。

零「わかりました。では、極力あなた方には死なないようにおれが守ります。ですので・・・戦闘中はおれに近づかないでください」

こういったとき、ほとんどの人が顔に疑問を浮かべたが、それにこたえてる時間はない。早速だがいかねばな。

零「では、作戦はこの趙雲に任せますので、彼女のもとに集まってください。それと、趙雲」

趙「な、なんですかな？」

いきなり、話を振って驚いてるな・・・。っと、それより・・・

零「さっき言ったことお前にも当てはまるからな？戦闘中は絶対おれに近づくなよ」

趙「・・・理由を聞いてもよろしいか？」

零「簡単なことだ。誰だって死にたくはないだろ？」

趙「は・・・？まあ、それはそうだろう。だが、それと水月殿に近づくなと言うのにどういう――」

ん？あの賊・・・２手に分かれやがった。なるほど、挟撃か。確かに少ない人数を攻めるには良い手だな。んー、ホントは全員で戦う予定だったが変更だな。

趙「水月殿！聞いて――――」

零「すまん。その話は後だ。見ろ、賊が２手に分かれている。どうやらあれの指導者は賊の割には頭がキレるようだ」

趙「な！？困りましたな、この少ない義勇軍でどうやって対抗すれば・・・」

零「そこでだ。趙雲達は全員で右のおそらく指導者がいるであろう方を頼む。おれは左を受け持つ。指導者を討ち取れば士気はガタ落ちするからな。なるべく早く討ち取ってくれ」

まあ、無茶苦茶な注文なのは承知の上だ。だが、そうしてくれないとどんどん被害が増えることになる。無理でもやってもらうしかない。

趙「承知。・・・だが、その作戦些か無謀ではないか？水月殿１人で賊の半分を相手にするなど・・」

零「そうか？賊はだいたい６００くらいだ。その半分の３００くらいなら趙雲でも相手にできるだろ？」

こう聞いたのが間違いだった。

趙「何をおっしゃる！１対３００など、よほど切羽詰まった状況で

ないと出来るわけがない！！それでたとえ勝ったとしてもこっちは重傷を負っているでしょう！水月殿は少々・・・いや、かなり戦を知らな過ぎる！！そして舐め過ぎている！！」

・・・たしかにそうかもな。正直おれはいまだ科学の発達していないこの時代の人間を舐めているのかもな。誰かが言った『戦争は生きた怪物だ』と。今1度これに学ぶ必要があるな。

零「すまなかった。早計だったな」

趙「分かればよいのです。では――――」

零「なら言い方を変える。おれが左の時間稼ぎをするから趙雲は早いとこ指導者を討ち取ってくれ。無論、無理はしない。どうだ？」

もっとも、時間稼ぎにもならないだろうがな。早く全滅して。

趙「・・・まったく、食えないお人だ。なら私は早いところ指導者を討たねばな」

零「頼んだぞ。・・・さて」

そろそろか。あと、5，6分てとこかな。

零「趙雲。そろそろ来るぞ。おれは先に行ってるから、お前たちも死なないように頑張れ」

趙雲「あいわかった。そちらも死なないように」

お互いに挨拶をし、おれは戦場に赴く。

零「さて、どの程度できるかな？とりあえず・・・」

南無っと、手を合わせ殺す前の弔いをする。そして・・・

零「フッ！！」

一閃。傍から見ればただ虚空に向かって手を振っているようにしか見えないだろう。だが、手を振った瞬間

零の手は真っ赤な血に染まっていた。それだけではない。賊の方はもっと悲惨だった。

なにせ、上半身がない死体が突然できたのだから。

賊「ひぃ！！？」

賊「な、何だよこれ！！？」

零「あー、やっぱり血糊が残って返り血を浴びるか。それに刃こぼれもする」

オリジナルならあり得ないな、と言って今度は賊に突っ込む。一瞬にして距離を詰められた賊はなすすべもなく零に斬り伏せられていった。ある者は首を、またある者は胴を、零は的確に人間の急所を刀で裂いていった。零が、その特徴的な長刀を振れば１０人は斬られていく。

賊の数は5分とみたない時間で３００人いたはずが今はたった数人になっていた。

賊「ば、化け物だ・・・」

零「ふー、さて、残りはたった7，8人。どう考えてもお前らの勝ち目は薄いな。どうする？」

零は挑発的に笑いながら聞いた。まるで攻めていてほしいかのように。

賊「あ、あぁぁあああああああああ！！！」

と、1人の賊が冷静さを欠いたか、あるいは恐怖に狂ったか、零に突っ込んだ。そして、零はというと、

パシ・・・

賊に回り込み頭を掴んだだけだった。

零「無謀だな、無理だな、無策だな。そんなんだから・・・」

刹那、頭を掴まれた賊の体から刀が生えた。正確には、零の体から生えた刀を賊の体内で枝分かれさせたのだが。それを一気に引き抜きその賊の体はバラバラになり、零は大量の返り血を浴びた。

零「・・・もういいだろ。去れ」

賊『ひぃいいいいいいい！！！！助けてくれええええ！！！！！』

零（ふう、終わったか・・・。思ったよりも早く終わってしまったな。さて、あっち様子は・・・）

趙雲達が戦っている方へ眼を向けた瞬間零は我が目を疑った。なぜならそこには趙雲だけが、賊と戦っている姿があったからだ。

その趙雲にも疲労の色が見て取れる。

零（何があった？たったこれだけの時間で趙雲以外全滅だと？一体なにが・・・ん？あれは矢か！！）

たしかにあれではたった数十人いただけの義勇軍では全滅もするだろう。だが、零が考えているのもここまで、すぐさま趙雲の助太刀に向かう。

と、ここである光景が目に付く。

それは、後ろから趙雲に斬りかかろうする賊の姿。趙雲が気が付いている様子は・・・なに。

零「くっそ！！間に合え！！」

それに気付いた瞬間零は己が持てる最大の速度で趙雲のもとに急いだ。

ＳＩＤＥ　趙雲

迂闊だった。私が率いた数十人の義勇軍は敵の矢によって、瞬く間に全滅させられた。

趙「ッ！せい！はっ！！」

今ではもう残ってるのは私１人だ。なんとか賊を倒しているがそろそろ限界も近い。正直、矢を避けながら近くの敵を倒すのはキツイ。

賊「しねぇ！！」

！？しまった。後ろを！！気付いた時はすでに剣はすでに突きを放っていた。

嗚呼、私はここまでか。願わくば、よき主に出会いたかった。

私は瞳を閉じその生が終わる瞬間を待った。

ズブり！

肉を貫く音がした。しかし、痛みはない。なぜ？

趙「・・・？」

始めは何が起きたのかわからなかった。ただ、目の前に人がいるということだけが分かった。だが徐々にその人が誰であるかわかってきた。

零「ゴフッ！！」

趙「水月・・・殿？」

水月殿だった。しかし、どこかがおかしい。さっき「ゴフッ！！」って・・・まさか！

それに気付いた瞬間私は腹の方に目を向けた。そこには深々と剣が突き刺さっていた。あきらかに致命傷だと見て取れる。

趙「あ、ああ・・・」

零「何・・・呆けてる。ブッ！？」

体から力が抜けていく。ここが戦場であることも忘れ、その場にへ垂れこんでしまった。
ぽたぽたと、私の頬から涙が流れた。水月殿・・・。
零「ッチ、いってぇ・・・。まあいい、そんなことより目標は・・・あそこか。フン！！」
突然水月殿が腕を振った。私はそれをただ茫然と観ていることしかできなかったが、水月殿の顔は明らかに血色は悪くなっていた。
零「おい！お前らの指導者はおれが討ち取った！！死にたくなければさっさと失せろ！！」

SIDE　OUT

SIDE　零

いつつ。なんとか、賊は追い払えたな。
零「おい、趙雲・・・いつまで・・・って、趙雲！？泣いているのか！？え、ちょ、な、なんで？」
趙「水月殿？あれ？まだ生きてる」
おいおい、人を勝手に殺すなよ。んー、でもそうか。この傷は人間にとっては致命傷だったな。

零「ああ、おれはまだ生きてる。安心しろ」

趙「う、うぅ・・・み、水月殿〜！」

わっぷ、な、なぜ抱きついてくる！？

趙「う、うぅ、ぐす、うぅ」

零「・・・お前のせいじゃねえよ。これはおれの判断ミスだ。よって、この傷もおれの責任だ。お前が気に病む必要はないよ」

趙「ですが！！」

零「いいんだよ。どうせおれはこの程度じゃ死なないから」

趙「・・・え？そ、それはどういうことですか？この傷は明らかに致命傷のはず・・・」

零「そこらへんの説明は村に戻ってからな。たぶん程立や戯志才も待ってるだろうからこれを機に話してやる」

趙「絶対ですぞ？」

零「ああ、絶対だ」

こうして、異世界での最初の戦は終わったのだった。

第1話（後書き）

はい、とっても駄文ですね。しかも眠すぎて地の文が安定してない・・・。

どちらのがよかったですか？零の1人称かそれとも第三者視点か。

気が向いたら御意見ください

第2話

異世界での初戦闘を終え、おれは趙雲の肩を借りて村に戻ってきた。

程「お疲れ様で・・・お兄さん!?大丈夫ですか?」

戯「と、とにかく早く治療を!!」

零「あー、いい。大丈夫だ。それよりも・・・」

どうしようかな?この際、全部話してしまおうか?それとも所々かくして話すか。

趙「さて、水月殿。話してもらいましょうか?」

零「ああ、そうd「それについては私がお話しましょう」・・・・・」

へえ・・・。

趙「何奴!!」

趙雲は声のした方に槍を向けるがそこには誰もいない。否、確かにいるんだがな・・・

零「おい、喋ったんならせめて姿を出せよ。紫」

と、言った瞬間空間に亀裂ができ我が怨敵の八雲紫さんがでてきた。

趙・程・戯「「「「なっ！！？」」」」

紫「もう、つれないわねぇ。こんにちは、趙雲さん、程立さん、そして・・・今は戯志才さんと言った方がいいかしらね？」

戯「！？何故そのことを・・・」

趙「それになぜ我々の名を知っている？それに、あなたは何者ですかな？妖の類か？」

紫「フフ、さあ？どうかしらね。そんなことより・・・」

零「ゆーかーりーちゃん♪」

紫「・・・・・（ガタガタガタ・・・）」

零「ん？どうしたのかな？そんなに顔真っ青でガタガタ震えちゃって。汗すごいよ？拭いてあげようか？あ、ごめん。いまヤスリしか持ってないや。仕方ないからこれで拭いてあげるよ！！」

紫「ご、ごめんなさい！！すみません！！つい出来心だったんです！！ただ、零クンをここに送ったら面白そうだなー、って思っちゃっただけなんです！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・」

零「・・・ハァ。まあ、もういいよ。その代わりスキマ使えるようにしてくれ。おれあの中に色々入ってるんだよ。食糧とか」

紫「わかったわ！・・・あ、そうだわ。髪紐解かない？」

零「あ？髪紐？やだよ。『アレ』になるじゃないか」

紫「ほどいている間は、包帯しなくていいわよ」

零「別にそこまで不便してないんだがな・・・。まあ、わかったよ。んじゃあ、おれ、服とか着替えたり怪我の治療してくるからこいつらに説明頼むな」

紫「りょうか～い」

さて、着替えますか。

□□□□□□□□□

ふう、やっぱり髪ほどいてある状態は落ち付かんな。まあ、じき慣れるだろ。っと、傷も治ったな。

じゃ、戻るか。

零「話は終わったか？」

紫「ええ、おわｔｔ・・・どちら様？」

はあ？何言ってるんだこいつ？

零「零だが？それで話は終わった？」

紫「あ、ああ、零クンか（やっぱりかわいいわね）。ええ、話は終わってるわ。それから・・・」

と、一旦区切って、おれに耳打ちしてくる

紫（あなたはこれから水無月と名乗りなさい。で、この世界には真名というのがあるのだけど、真名を零になさい。真名と言うのは許した相手にしか呼ぶことが許されない神聖な名前の事よ。これで、ある程度の面倒事は回避できるわ）

零（つまりどういうことだ？）

紫（この世界には天の御使いというのがいてね、その人は私たちの世界と酷似している所から来てるのよ。わかった？）

零（了解。ついでにおれについてはなんて言ったんだ？）

紫（妖術使いで通しておいたわ。本当の正体の明かし時は零クンに任せるわ）

零「そっか。ありがとな」

紫「フフッ、どういたしまして。それじゃあ、私は帰るわね」

零「ああ、また頼る時があるかも知れんがな」

紫「それじゃあ、ね」

と、紫はスキマに入っていった。さて、おれもすることしますか。

零「話の内容は分かったか？」

趙「ええ、大体わ。水月殿は妖術使いだったのですね」

零「ああ。っと、そうだ。お前達とは一緒に戦ったわけだからおれも偽名のままってのも気持ち悪いから、本名教えるよ」

程「偽名だったのですか～？」

零「ああ、すまんな。おれの名前は水無月。真名が零だ」

戯「なっ！？じ、じゃあ、私はずっと水無月殿の真名を・・・」

と、顔を青くする戯志才。

零「別に気にすることはない。元々、真名で呼んでくれた方がこっちとしては違和感がなくていいんだ。それに、今お前達に真名を預けた。だからいいだろ？」

二コリと笑って気にしてないと主張する。まあ、あのときはそんなん本気で気にしてなかったしな。

稟「・・・・・ありがとうございます／／／／（な、なんて顔をするんですか！！）。では、私も。私の本名は郭嘉と申します。真名は稟です」

零「いいのか？こんなあって間もないいかにも怪しい男に真名を預けて」

稟「はい。零殿は預けるに値する人とお見受けしました」

風「稟ちゃんが預けるなら風も預けます～。風は風と言います。以

後よろしくです～」

星「私も預けるぞ。私の真名は星と言う。よろしくお願いしますぞ、零殿」

零「ああ、よろしくな。あと、別に殿はいらない。呼び付けでいいぞ」

星「わかりました。では零と。・・・ところで・・・」

零「ん？なに？」

星「零は男・・・ですよね？その割におん「言うな！！」は？」

零「それは言っちゃいかん！自分でもわかってる！おれが1番気にしていることだ！！」

星「そ、そうですか。しかし・・・美人ですな」

風「ほんとですね～。髪を解くと女の子になるとは珍しいこともあるものです」

稟「でもこれは・・・女としては微妙な気持ちですね・・・。男に負けてる気が・・・」

ハァ・・・。やっぱりこうなるのな。もう諦めようかな。良いじゃん、どうせ髪縛れば男に見えるんだし。うん、もう気にしない。

星「それで・・・零はこの後どうするのですかな？見たところ手持ちなしに見えますが・・・」

零「んー、そうだな・・・。まず、星と手合わせするでしょう？」

星「おや、覚えていたのですか？」

零「まあな。約束は守る。・・・で、その後はどこかに仕官でもしようかな？」

出来れば董卓の所がいいから・・・洛陽？だっけ。そこがいいな。まあ、ぶっちゃけ、曹操のとこでもいいんだけど、それはまあおれが気に入るかどうかなんだよな。気にいらなかったら董卓のとこだな。ん？そいつも気に入らなかったらどうするかって？大丈夫だ。おれの勘がそいつは大丈夫と言っているから大丈夫だ。

星「仕官ですか・・・。あてはあるのですかな？」

零「ん？あるよ。洛陽に行ってみようかと」

と、言った瞬間星は一瞬とても残念そうな顔をした気がしたんだが・・・気のせいか？

零「で、手合わせは何時やるんだ？」

星「今からでもかまいませんぞ？」

零「お前は疲れてるだろ・・・。よし、んじゃあ、明日の朝だな」

星「わかりました。では、明日」

零「ん。・・・腹減ったな・・・。なんか作るか」

そういえば朝から何も食ってなかった。ていうか寝てるうちにだから何も食ってないに決まっている。
ついでに余談だが、一応おれは人間を食うぞ。まあ、好き好んで食ったりしないけど、本気で飢えたら食う。最後に食ったのが数億年前の話だがな！！

風「お兄さんは料理出来るのですか～？」

零「出来るぞ。えーっと材料は・・・」

オープンザスキマ。使えるようになってた！えーっと、食材は・・・

・・・あれ？

いや、あるにはあるんだけど減ってない？ん？何だこの紙。

『食費が浮いて助かってるわ☆ｂｙゆかりん☆』

・・・プッツン

零「・・・さて、あのババアどう料理してあげましょうか。人の食材勝手に使った罰ですね。とりあえず・・・削りましょうか？」

稟「ど、どうしました零殿？怖いですよ？」

零「・・・いっそ、おろしましょうか？」

稟「なにをですか！？ちょっと落ち付いてください！！」

バチン！！

零「い！？なんだよ、どうかした？」

稟「それはこっちが言いたいですよ！」

風「一体どうしたのですか～？急に様子が一変しましたが」

星「なにか問題でも？」

零「ああ、実はな・・・」

かくかくしかじか

零「と言うわけだ。あー、どうしよ。この調子じゃあすぐに無くなる。やっぱちょっとおろしてくるわ」

星「やめてください。それなら食材を買えばいいじゃないですか」

零「お金ない」

星「・・・致命的ですな。どうするので？」

零「・・・予定変更。星手合わせは次会ったときでも構わないか？」

星「別に構いませんが・・・急にどうして？」

零「ちょっと、村救ってくる。で、食糧もらう」

風「なるほど～。たしかにいいかもですけど、１人で大丈夫なので

すか～？」

零「ん？余裕だろ。さっきの戦い観てた？なら分かると思うが・・・」

風「確かに～（力量は申し分ないですね～。なら次は・・・）突然ですがお兄さんは夢とかありますか～？」

む？急に妙なこと聞いてくるな。夢か・・・。元の世界では平穏に暮らしていければよかったがこの世界だとまた勝手が違ってくるな。紫も好きにしていいって言ってたし、やっぱ・・・

零「天下でも統一してみようかな？」

星・風・稟「「「！？」」」

零「どうも今の世は辛気臭いからな。おれはこういう空気は好きじゃないんだよ。だから、おれが変えてやろうと思ってるな。まあ、そのためには犠牲が付きまとうがな」

平和が一番。少なくともおれの眼の届く範囲の奴らは救ってやりたいよな。・・・まあ、国とか持つ気はないけど。面倒だし、終わった時にこの世界から消えにくいし。

零「で、それがどうしたんだ？」

風「今ので決めました～。風はお兄さんに仕えます」

稟「な！？風！？それは本当ですか！？」

風「はい～、力量もあり、器も広い。ここまで良い主、そうはいませんよ～」

稟「ですが「あー、ちょっといいか？」零殿？」

零「おれに仕えるって言ったけど、おれは別に国とか持つ気はないぞ？」

星・風・稟「「「え？」」」

あ、やっぱり、持つと思ってたのね。よかった～、誤解が解けそうだ。

風「・・・それは何故ですか～？」

零「動きにくいからな。それに仮におれが国を持って天下を統一したとしよう。で、世の中は平和になった。だがな、それはあくまで上におれ達がいるからだ。支配しているからそれに従っているということになる。それじゃあ、なんか駄目だろ？抑えてなきゃならない平和なんて窮屈なだけだ。おれは支配したいんじゃない。共生したいんだ。みんなで力をあわせて国を作っていくような感じの平和がいい。
だから、おれは国は持たない。おれの理想をかなえてくれそうな主に仕官し、その主とともにそういう世界を作っていきたいと思っている。で、どうするんだ？今の話を聞いて」

ぽか～ん。

零「あり？なに？みんなボケッとして」

星「いや・・・意外にものを考えているのですな。驚きました」

零「失礼な！？少なくとも頭は紫と同じぐらいだぞ！」

星「紫？ああ、あのうさん「それは言っちゃいかん！！」？？わかりました。あの妖術使いのことで？」

零「そう、そのババア」

星「私達はあの者がどれほど頭がよいのか分からないのですが」

零「そうだったな。まあ、紫が仕えた国は確実に天下統一するな。っと、その話は置いといて・・・」

稟「置いといて良いんですか！？いま私達すごいこと聞きましたよね！？」

零「あいつが誰かの下につくとかありえないから。で、風よ。どうするんだ？あの話を聞いてもおれに仕えるというか？」

風「そうですね～、風が仕えたいのは国も持つような方なんですよね～。しょうがないですね～。残念です」

零「つまり、仕えないということだな？」

風「はい～。一度言っておきながらすみません～」

零「気にすんな。よし、旅発つ前にお前らに技を見せてやる。手合わせ出来なかったお詫びだ。ま、もっともすこし簡単な技だけどな」

星「ほう、見せるということはよほど自信があるということで？」

零「まあ、多少は。ふむ・・・」

場所は・・・あの木の下でいいか。

零「よし、あの木の下だな。ちょっと来てくれ」

うーん。まあ成功はすると思うんだけどな・・・。問題はそれが『視えるか』どうかなんだよね・・・。とりあえずスキマを開いておれの刀達がいないとき用作った刀を出してと・・・

この刀は鍔も柄もない。簡単にいうならどこぞの最強の弟子の師匠の1人の忍者っぽい人の剣みたいな感じだ。もしくはブリー〇の主人公のあれを細くした感じ。

なぜ、この刀を使うか。それは、仮にも人みたいなやつが体中から刀を出すのはちょっと・・・ねえ？

と、思ったからである。あと、ハンデの為でもあるが・・・。

零「よし、この辺だな。一回しかやんないからよく見てろよ？」

星「わかりました。一挙一動見逃しません」

チャキン。星がそう言った瞬間にはもう既に終わった。よかった、腕は落ちてないし精度も変わりないな。

零「んじゃ、がんばれよ」

星「え？まだ技というものを見せてもらってないのですが・・・」

ありゃ？見えなかったのか？まあ、一応刀は抜いたしな。いいや。

零「あ、それと、そこ危ないから早く下がった方がいいぞ。んじゃあ、またな」

さて、村探しじゃ～

ＳＩＤＥ　星

なんだったのだ？零は技を見せてくれるというから着いて行ってみれば零はすぐに行ってしまった。

風「とりあえず戻りましょ～」

星「そうですな？」

それにしても今は何ともないが何故零をみるとこんなにもドキドキするのだろう。特に零に肩を貸しているときなんかもう・・・

星「／／／」

稟「・・・？どうしたんですか星殿？顔が赤いですよ？」

星「な、なんでもない！」

あの時の事を思い出したらまた顔が熱くなってきた。本当になんなのだろう？零をなぜこんなにも意識してしまう？初めはただ整った顔の方だなと、思っていただけなのに、いつからこんなに意識し始めたのだ？・・・あ、あの時か？零が私を助けてくれた時からか？・・・そうだ、あの時からだ。

あの時の零はかっこよかったな。
っ、また顔が熱くなってきた。まさかこれは恋なのか？だとすれば
――――――

ドゴォオオン！！

稟「何事ですか！？」

突然私たちの後ろで何かが倒れたような音がした。

星「これは・・・」

私達がさっきまでいた木が倒れていた。しかも、ただ倒れているのではなく切り刻まれるように。

稟「これは・・・零殿が？」

風「おそらくそうでしょうね～。本当にすごいですね～。もし、お兄さんが敵に回ったら怖いです～。
それに、これですこし簡単だっていうからすさまじいですね～」

風達がそう言っている間私は嬉しくてなにも言えなかった。
惚れた男が自分よりも遥か高みの武を持ち、自分が目指そうとする目標ができたのだ。もう、嬉しくてしょうがない。
どうやら私は本当に零に惚れているようだ。なら・・・

星「次会った時は是非手合わせして、閨に誘おうかな・・・？」

稟「え、まさか星殿達はもうそんな関係でブーーーーー！！！」

風「稟ちゃーん、トントンしましょうね～」

今度会った時にこの気持ちを打ち明けてみようか？

第2話（後書き）

零「おい、作者よ。何故俺をこの世界にやったんだ」

作「気まぐれ」

零「それでこの駄文か？ていうかお前、原作知らないだろ」

作「流れが大まかに分かるくらいだな。あと、キャラの性格が少し」

零「・・・そんなんで大丈夫か？」

作「大丈夫だ、問題ない」

零「あっそ。とりあえず、なんかフラグ立ったな」

作「はい。ヨカッタデスネ」

零「うぜぇ・・・。で、おれはこれからどうするんだ？」

作「とりあえずオリキャラ出します。ええ。零クンにはそういうのが必要です」

零「まあ、1人旅はたるいからな」

作「どんなんがいい？ヤンデレ？ツンデレ？クーデレ？ロリ？貧乳？巨乳？無口？それとも――――」

零「知らん。好きにしろ」

作「釣れませんねぇ。まあいいですよ。どうなっても知りませんよ？」

零「感想等お待ちしてまーす」

作「え？無視？ちょ、待ってーーー！！」

第3話

星達と離れて二週間程経過した。その間当然色々なことがあったわけで、歩いていたおれを襲ってきた賊を千切っては投げ、おれの事を女と間違えて襲ってきた賊を千切って千切りしては投げ、村を襲っていた賊を千切っては投げと、主に賊を千切っては投げていた。無論村も救ったりしていたのだが、最初の目的である食糧調達もしようと試みたのだが、それは初めの段階で脆く崩れ去った。だってさぁ！！どこの村も貧困の具合がすごいんだって！！逆におれの方が食糧恵んじゃったよ！！

おかげで今逆にこっちが貧困ですよ？現在進行形で腹ペコですよ！？本気で人食いを考えてるんだよ！？次賊が現れたら食ってやる・・・。

で、今おれは森？と言うか山を歩いて洛陽に向かっている。・・・本当にこっちであってるかどうか知らんけどな！！最近よく迷うんだよなー。洛陽に向かってると思ったらまったくの逆方向に行ってたし今どうなってるのか全くわからん。まあ、要するに彷徨っているのだよ。

とか思ってると山を出た。

零「ん？何だあれ？賊に襲われたのか？」

おれの眼に映ったのは賊に襲われ無残な姿になった村があった。

あれは・・・もう既に蹂躙された後か。生き残りでも探すか・・・。

で、村に入ったんだがまだ何人かいるな・・・。おそらく賊だろう。

で、こんなに遅くまで残ってやっている事と言えば・・・

???「嫌！嫌ぁ！！」

やっぱそれだよなー。・・・・・ドカスが。

零「あっちか・・・」

村の真ん中の辺にある小さな物置からだった。

ここだな。

思いっきり扉を蹴破る

賊「な、なんだ！？」

そこには賊が3人と1人に半裸の女の人がいた。

零「下衆が・・・。もういい。失せろ」

そのまま3人をスキマに突っ込んだ。後で調理してやる・・・。

零「大丈夫か？」

???「・・・」

まだ喋れないか。まあ、当然だ。怖かったに違いない。

零「とりあえずここを出るぞ。ほら」

手を差し出し、それに従う女の人。

そして、近くにあった森の中に向かった。

零「で、大丈夫か？

？？？「・・・うん」

零「そうか。とりあえず名乗るぞ。おれは水無月。仕官しようと旅をしてるんだが、いまだに目的地に着かないアホな旅人だ」

自分で言ってて悲しくなってきた。ちょっと場を和やかにしようと言ってみたが自分が悲しくなってくるからもうやらないでおこう。

？？？「名前、ない。真名ならある」

名無しか・・・。どうしたものか。真名を気安く聞くわけにはいかないし・・・。

零「もしよければおれが名付けていいか？」

？？？「！・・・いいの？」

零「ああ、いいぞ。んー、そうだな・・・よし、お前が選んでくれ、静香、七実、夜奈、どれがいい？」

言うな、分かっている。どれもこれもこの時代に似つかわしくないだろう。それは分かっている。だがこんなもんしか浮かばないんだよ！！関羽とかなに！？どうやったらそういうのが思いつくかおれには理解できん！！

？？？「・・・静香」

零「ん？」

？？？「静香がいい」

まあ、１番無難なとこだな。少なくとも変ではないだろう。

零「そうか。んじゃあ、静香」

静「時雨」

零「え？」

時「真名」

零「いいのか？」

時「いい。水無月、助けてくれた。名前付けてくれた」

零「そっか、じゃあ、おれのも預けるよ。おれの真名は零。よろしくな時雨」

そう笑顔で答えた

時「よろしく／／／」

ん？顔が赤いな。どうしたんだ？

零「で、これからどうするんだ？おれはご飯を食べるけど・・・」

そろそろ、おれの作った自動料理術のよっておいしく調理されてい

るころだろう。

時「・・・零の役に立ちたい」

零「は？おれの？」

時「うん」

役に立つって・・・

零「具体的に言うと？」

時「何でもする」

ハァ・・・、なんでもって・・・。しょうがない

零「んじゃあ、おれの助力ができるように今から鍛えてやる。何か得意なことはあるか？」

時「・・・暗殺？間者？」

おお、結構役に立つようなステータスじゃないか

時「・・・みたいなのがいい」

そこで、ズコー！と、こけた

零「希望かよ！それになんでそんな汚い仕事がしたいんだ？もっとまともなのがあるだろうに」

時「・・・こういうのの方が役に、立てる」

・・・あくまで役立つ第一なのね。

零「・・・わかった。そういう方向で鍛えてやる。あ、これはおれからの注文なんだけど、おれの侍女もやってくれない？そういう、料理とか色々出来る人が欲しいんだ」

時「うん。いいよ」

よっしゃ！！これで少しは楽ができる！

零「それじゃあ、この森に籠って修行するぞ。と、その前に頭貸して」

首をかしげて意味がわからないと言いたげな反応をしたが、素直に貸してくれた。そして、おれはそこに手を乗せた。

時「！？／／／」

何してるかって言うと、おれの能力を使って、時雨の学習能力の速さ、物事を教えた時の吸収の速さ、教えた事をものにする速さ等々を上げているのだ。え？なんでかって？馬鹿野郎！！そんな基礎も出来てない奴に暗殺術とかそういうの教えるのは時間掛かってたるい上にものすごく大変なんだぞ！！

零「こんなもんだな。よし、まずは気配の事について教えるぞ。さて、どうやったら人に気付かれずに入れると思う？」

時「・・・気配を絶つ？」

零「違う。おれ達が生きている以上完璧に気配なんて絶てない。なら、どうするか？気配を溶け込ますんだよ」

時「気配を溶け込ます？」

零「その通り。生物は生きている以上絶対完璧に気配を絶つことはできない。仮に完璧にできたとしても逆にそこだけ何もないようで違和感がある。ならば、気配を溶け込ませ、あたかも最初からそこにいたかのようにするんだ」

と、こんな感じで時雨の教育が始まった

□□□□□□□□□□□

で、修行を初めて3週間経過した。

時間が飛んだって？修行内容なんか見ても詰まらんでしょ？

んで、今日は遂に卒業式だ。内容は・・・

零「おれから一本取ってみろ」

時「無理」

即答でした。おれってそんなに強いか？一本ぐらい取れると思うんだけどな・・・。基本手抜きだから。

時「その手抜きでも化け物じみている」

おおっと、心を読まれたぞ。すごいな。おれこんなこと教えた覚えはないんだが・・・

時「好きな人の考えを読むことなんて造作も、ない」

零「つうか、読むな！！しかも、何だよ好きって。ライクの方か？」

時「ラブの方」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんで、英語がわかるの？

時「気にしちゃダメ」

さいですか。

零「って、だから読むなって。じゃ、おれから一本と――――――」

スチャ

首にナイフが付きつけられる。ん〜？どっからだした？とわ言わないけどさ、まあ、暗器だし。教えたのおれだし。でもさ〜、

零「いきなりは無しじゃね？」

時「暗殺に待ったなし。そう教えたのは、零」

零「そうだけどさ・・・。あー！まあいいや。お疲れ様。卒業だ。さ、旅に出るか」

時「うん。・・・あ」

零「ん？どうした？」

時「あっちの村が、賊の襲撃を、受けてる」

あっちって・・・、見渡す限り村とかないんだけど。こいつの察知能力は化け物か！！

時「勘だけど」

零「勘かよ！・・・まあ、正直目的地がどこにあるかわからんからそっちに行くでもいいかもな」

あ、そうだ。肝心なこと言うの忘れてた。

時「なに？」

零「もう突っ込まんぞ・・・。でだ、おれは何に見える？」

時「？零に見える」

零「いや、そうじゃなくて、生き物として何に見える？」

時「人間？」

零「そうだよな・・・。実は、おれ、人間じゃないんだ。ほら」

翼を背中から出す。最近3対になった漆黒の翼だ。

時「・・・」

零「いまさら言うのもアレなんだがこれを知ってお前は「関係ない！！」・・・え？」

珍しく大声で叫ぶ時雨に驚いた。

時「人間じゃない、とか、関係ない。零は零」

零「そうか・・・。んじゃ、行くか。空飛んで」

時「うん。・・・うん？」

時雨を背に乗せ羽ばたく。

時「・・・！・・・！？」

時雨がじたばたともがいている。あぶない。

零「危ないぞ。落ちたら死ぬぞ」

時「いきなりはやめて。びっくり、する」

零「悪かったな。あ、そうそう。おれよく飛んでるときに寝ちゃうから、この板持って落下した場所に座っとてくれ」

スキマから『たすけて』と書かれた、板を時雨に渡す。

時「これ、なに？」

零「おれ一回寝たらすぐに起きないからさ、それ持っておれの背中

で座ってるといいよ。間違っても動くなよ。思わず斬っちゃうかもしれないから」

時「・・・わかった。そうする」

零「よろしい。じゃ、落ちないようにな～」

そのまま、結構なスピードで村のある方へ飛んで行った

第3話（後書き）

作「はい、駄文でした」

零「オリキャラが出てきたな。時雨だっけ？」

作「そうですよ。イメージは任せます」

零「結構クールなんだよな・・・」

作「そうですね。では今回は特に喋ることもないのでここまで」

零「感想等お持ちしてます」

第4話

時雨を乗せて村に向かう道中、ピンチです。

零「時雨ぇ、眠い・・・」

時雨「もうちょっと頑張る（かわいい／／／）」

そう、眠いのです。太陽の光がポカポカと・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ

！？

零「時雨ぇ、もう無理。おやすみ・・・」

時雨「だめ、せめて羽根をしまって。もう村に着く」

零「は〜い」

羽根をしまい、そのまま意識を手放した。

SIDE　？？？

今この村は黄巾党の襲撃を受けようとしている。たまたま旅の途中にこの村に立ち寄ったのだけど、まさかこんなことになるとは思いもしなかった。

しかもこの村、義勇軍が少ない。攻めてくる黄巾党の半分にも満たない。本当にどうすれば・・・。

???「凪ちゃん!!上や上!!」

???「え?ふぐぅ!?」

なんだ!?上から何か降ってきたぞ!?これは・・・人?

零「Ｚｚｚ・・・」

時「『たすけて』↑掲げてる」

・・・とりあえず重たいからどいてもらいたいな・・・

ＳＩＤＥ　Ｅｎｄ

時「零・・・起きて」

零「Ｚｚｚ・・・」

時「・・・（スチャ」

ブス!!

零「!?なに?何事!?敵襲?敵襲なのか!?」

時「そう。それから、早くそこどく。下の人がかわいそう」

零「ん?あ、ごめん」

誰かを下敷きにしてしまっていた。幸い、怪我はないようだ。時雨がうまくやったんだろ。

???「あの、大丈夫なんですか?随分高いとこから・・・というか、なんで高いとこから?」

零「お、時雨、ちゃんと板持ってるな。えらいぞ」

そう褒めると擬音に「えっへん」と、付きそうなぐらい、胸を張っていた。・・・あ、こいつ割とあるじゃないか。

???「聞いてますか!?」

零「あー、聞いてる聞いてる。おれは水無月。こっちは従者?の静香」

???「そうじゃなくて!なんで上から落ちてきたんですかって聞いてるんです!」

零「あ?この村いま賊の襲撃を受けてるのか・・・。なるほど、おれのすばらしき睡眠時間を奪ったのはそいつらか。フフフフ、ハハハハハハ!!」

???「な、なんや?急にどないしてん?」

???「急におかしくなったの」

時「零。落ち着いて」

零「おれは何時でも冷静ですよ。さて、あなたたち、お名前は？」

楽「わたしは楽進です。この義勇軍を率いてます」

李「うちは李典や。凪と一緒に義勇軍やっとる」

于「沙和は于禁なの～。そのほかは凪ちゃん達と一者なの」

零「そうですか。さて時雨さん。あの睡眠を邪魔した糞でドカスな賊を一匹残らず消してきて下さい」

時「無理。零、落ち着いて。深呼吸」

零「・・・そうですね。ふ～、は～。ん、落ち着いた。さ、殺してくるか」

時「・・・・・・」

零「・・・わかった。作戦もちゃ～んと考えて殺すから、お願いだからその剣をしまってください。
で、楽進。今どういう状況？」

楽「え？あ、今は北、西、東に柵を立てたのですが、東の方が間に合わなくて他に比べ手薄になっている状況です（どこから剣を出したんだろ？）それと、一応官軍にも援軍を頼みました。来るのに時間がかかりそうですけど・・・」

時「・・・困った」

零「そうだな。官軍か・・・、邪魔になるな。時雨、ちょっと、来

るまでの時間引き延ばしてきてくれ。殺すなよ？」

時「それくらいなら、造作もない。行ってくるね」

シュバッ！と忍者みたいに消える時雨。いやもう忍者だな。天井に脚だけで立ってられるし。

楽「な、何してるんですか！？」

零「ん？何が？」

李「何が？やないで！！官軍の到着を遅らせて何がしたいんや！？村を襲わせるんか！！」

零「いや、人が増えると邪魔だし。それに・・・」

少し殺気を放つ。

零「賊は『おれが』皆殺しだからな」

楽「っ！？（な、なんだこの殺気は！？）」

李「（この兄さん本当に人間かいな・・・）」

于「（こ、怖いの～）」

零「まあ、さすがに三方向同時は無理だけどな。楽進たちにも協力してもらうさ」

楽「そ、それなら尚更官軍の到着を・・・」

ハァ、分かってないな・・・。官軍は文字通り邪魔なんだってさ。

零「だから、邪魔なんだって、官軍は。本当に」

于「その邪魔の意味がわからないの～。数は多ければ多いほどいいはずなの～」

零「・・・ああ、そういうことか。まあ、そうだろうな。兵法にもそうやって記してあるし」

楽「だったら！！」

零「でもさ、兵法ってさ、普通の人間同士が戦った時の事でしょ？悪いけど、おれは普通じゃないから兵法なんて意味をなさない」

楽「それってどういう――――」

零「お話はここまでだ。そろそろ、配置を決めるぞ。まあ、簡単だけどな。東はおれ一人で、北は楽進と于禁が義勇軍の半分を率いてくれ。んで、西に李典が残った義勇軍を率いて迎撃って感じか？」

楽「ちょ、ちょっと待ってください！！その作戦は水無月さんに負担が掛かりすぎます！！死ぬ気ですか！？」

于「そうなの！考え直すの！！」

ん～？そんなに駄目か？おれ結構一対多数に向いてるとおもうんだけど・・・

李「銀色の髪・・・、着流し・・・、そして顔の包帯、で、名前が水無月って、もしかして、『刀神』の！？」

楽・于「「ええっ！？」」

あ？何だそれ。刀神？まあ、確かに体から刀生やすからそう言えなくもないけど・・・

楽「刀神って、あの数々の村を賊から救って・・・」

于「さらに救った村に何も見返りを求めず、かわりに大量の食糧を寄付するあの刀神なの！？」

零「あ～、そういえば、立ち寄る村によく賊が襲ってきたな～。今となっては良い思い出だ。ていうかさ、なんで、そんなにきらきらした目で楽進はおれの事見てくるの？」

李「凪はな～、兄さんに憧れとるんや」

は？おれに？

于「そうなの。噂は最近だけど次々に黄巾党を潰して行く刀神さんに凪ちゃんはベタ惚れなの」

楽「真桜！！沙和！！」

む。憧れるって・・・。慣れんな。おれは基本的に畏怖されてたからな～。そういうのはホント慣れてない。なんか、恥ずい。

零「と、とりあえず、賊来ちゃうよ？配置の付こうよ」

楽「待ってください！！私は水無月様の所に配置してください」

零「いいよ」

楽「無理なのは承知です！そこをなｎ――え？」

零「いや、別に今回は眠いし、そこまで派手にやるつもりはないから良いよ。どうせおれは岩投げるだけだし」

楽「い、岩ですか・・・」

零「そ、岩。まあ、もっとも・・・」

そこでいったん区切り、満面の笑みで言う

零「賊ぐらいすぐに全滅するだろうな。さ、移動移動」

楽「え？あ、待ってください！って、眼、見えるんですか？」

零「ん？そりゃあ、包帯巻いてるから見えないよ？」

楽「え？そ、それはつまり巻いてなければ見えるってことですか！？ならなぜ・・・」

零「説明はあと。さ、行くぞ」

東の配置に着いたおれ達だが・・・

零「なんか東だけ妙に多くない？」

楽「そうですね・・・」

そう、多い。多いのだ。ぱっと見積もっても５００はいる。まあ、この岩の前では無意味だが。

零「んじゃ、岩出すね」

楽「え？どこｋ――――」

ズドォン！！！！！

スキマをおれの頭上に開いて宇宙から持ってきた『岩』を両手で持つ。その大きさ、直径１００ｍくらい？

楽「な、ななな・・・」

零「ん～、冷たい。それに割と重い。投げるか。あそぉれ」

ひゅーーーーーーーズドン！！！！

『ぎゃあああああああああああああああああ！？！？！？！

?!?」

零「さ、残党狩りだ・・・って、どうしたんだ?楽進。そんな、変な目で見て」

楽「あ、あなたは何者なんですか?」

零「何者って、ん?あ、賊が逃げた」

そう、あの岩を投げた瞬間賊は蜘蛛の子を散らすように逃げているのだ。ん~。

零「終わっちゃった・・・。んじゃ、おれは西の様子を見てくるから、楽進は北をお願い」

楽「ちょっと待ってください!!話が・・・」

零「後で全部説明するよ。じゃ!」

さて、西はどうなってるかな?

零「あれ?いない。なぜに?」

おかしい。まさか、全滅したのか?賊が。普通に義勇軍はいるんだ

が・・・

零「あ、李典。これどういうこと？」

と、目についた李典にこの状況の事を聞く。しかし、彼女をちんぷんかんぷんな様子で

李「わからん。黄巾党どもみんな戦闘の途中で「て、天災だぁ！！」って、言って逃げ出して行ったんや。意味がわからんで」

天災？まったくもって意味がわからない。おれはただ宇宙にたっくさんある大きい岩を投げただけだし・・・

時「それが原因」

李「わあ！？」

いきなり、足元から声が聞こえた。それに、びっくりした李典。

零「お、時雨か。お疲れ。どんな感じ？」

時「あと少しで到着」

零「お、ぴったりじゃん。さすがだな」

見れば、馬が走ってきているような音がしている。

時「それ、取らないの？」

零「ん？ああ、そうだな」

包帯を巻きとる。ていうか、これもう面倒臭いな。まあ、付けろって言われてるから付けるけど。

李「！！？／／／（め、めっちゃかっこいいやないかい！！）」

ん？なんか、李典、赤くなってない？風邪か？

時「零は自分の価値に気付くべき」

零「あ？おれの価値？そんなんただそこら辺にいる人たちとあまり変わらないだろ」

時「・・・髪紐」

零「わーってるよ！たくっ・・・」

結局これを取るのか・・・。ハァ・・・。

李「！？な、なあ、兄さんは「男だ！！！！！」そ、そうかい」

零「はあ、とりあえず、中央に集まるか。時雨、茶葉ある？」

時「もちろん」

え？なぜそんなものがあるかって？スキマなめんなよ！その気になればどこからでも採ってこれるぜ！！

零「さすが。じゃ、行くか」

あっさりと戦闘を終えた俺たちはそのまま中央へと向かった。
だが、この時俺は知らなかった。この後、とてつもなく面倒なことになるなんて・・・

キャラ説明（前書き）

ちょいとここらでキャラ説明します。主に零クンがどういう性格でどのくらい強いのかという感じです。

キャラ説明

名前　水月　零
偽名　水無月
真名　零

この作品の主人公。八雲紫からは無意識なフラグ製造機とか言われてるが本人にまったく自覚がない。
要するに鈍感。しかし、告白されればされたで真面目に考える人。
約束は絶対に守ろうとすることから、信頼は厚い。反面、自己犠牲が過ぎる所があるが、作中にもそれは現れていて、３００人相手取るためにごちゃごちゃ言っていたが零が敬語の時は割とキレてるときや表面上だけのいいことを言うときであるが、表面上の場合、自分以外をなるべく傷つけないようにするためである。この性格のせいでもとの世界では平安時代から平成まで封印されていた。
強さはこのような感じ

零、遊び時

零＞呂布＝時雨＞夏侯惇＞関羽＞張遼
ちなみにこの人選は適当です。あくまでこれは零クンの強さなので気にしないでください

零、本気時（翼を出した状態）

零＞＞＞＞＞＞呂布、以下同じ

零、堕天時（詳細は次です）

零＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞越えらえない壁＞＞＞呂布

零、鬼巫女＋堕天（詳細は同じく後です）

零≧≧越えられな壁＞＞＞呂布

と、こんな感じです。はい、もうチート爆発ですね。こんなのだれも勝てませんよ。

堕天　零が世界中の絶望と恐怖を取り込みそれを力に変換した状態。取り込み過ぎると理性はあるが本能丸出しの状態になる。なお、この状態のときは零の体に刺青のような黒い文様が出る。

鬼巫女＋堕天　その名の通り鬼巫女と堕天のプラスです。この状態はマジで世界崩壊を危機に陥れる程の力があるが、特殊な結界でなんとかなるらしい。なお、鬼巫女の事は自分で検索して調べてちょ！

キャラ説明（後書き）

こんな感じです。まあ、最強キャラです。敵なしです。

感想等お待ちいてます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0969t/

真・恋姫†無双　外史に落とされた絶望

2011年5月22日01時10分発行